



(Re)Craft-ing of Japanese Practice: An Ethnography of Two Japanese Saké Breweries circa BY H31 & BY R01

Miyagawa, Shimpei

(Degree)

博士 (経営学)

(Date of Degree)

2020-09-25

(Date of Publication)

2025-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7845号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007845>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位論文審査要旨

氏名 宮川 新平

論題 (Re)Craft-ing of Japanese Practice:
An Ethnography of Two Japanese Saké
Breweries circa BY H31 & BY R01
(二つの日本酒蔵のエスノグラフィー)

審査 令和2年8月

神戸大学

論文内容の要旨

本研究は、日本の酒造りの現場における実践を、2つの酒蔵でのエスノグラフィーによって明らかにしようとするものである。具体的に筆者が設定しているのは、(1)酒造りの実践が、日本の伝統的な酒造企業の中でいかに行われているのか、(2)またそうした実践は、近代化しつつある現場においてどのようにアレンジされているのか、という2つの研究課題である。これらを導出するために、まず、3つの領域に対する先行研究のレビューが行われている。

1つ目は、実践(practice)に関わる研究のレビューである。ここではまず、実践をめぐる従来の議論と筆者自身によってたつ議論とを、人々の認知的作用に還元するという意味で人間主義的な「主観主義(subject-centered orientation)」と、身体と心の二分法を超越しようとする「ポスト人間主義(post-anthropocentric orientation)」の対比として描いている。こうした議論に基づき、Gherardi(2010)に依拠しつつ、「実践とは、仕事や組織化における物事の理解のプロセスを、歴史的なプロセスであり、物質的であり、また不確定なものとして明らかにする言説のあり方」という、筆者なりの実践の定義が導出される。

2つ目は、組織研究に大きな転換をもたらした言語論的転回、組織ディスコースに関する研究のレビューである。現象学をはじめとするそれまでの議論が個人の主観的意向を土台として、人々の認識に注目して問題を解き明かそうとしてきたのに対して、人々が共通して用いる言語に注目して、人々の意識ではなく言語を土台として問題を解き明かそうとする動きが、ここでいう言語論的転回である。近年の社会物質性の議論までレビューした上で、筆者は、この言語論的転回および組織ディスコースの理論的視点の重要性、独自にそれらに伏在する問題-例えば、存在論と認識論のギャップなどの問題-を指摘する。次に、そうしたギャップを埋めるための方法として、エスノグラフィーへと注目している。

それがレビューの3つ目の領域である。ここでは組織研究における重要な調査方法の1つであるエスノグラフィーについての丁寧なレビューが行われる。筆者によれば

エスノグラフィーとは、「研究対象となる人々と一緒に生き、そのように生きる」ことを伴う研究方法であり、研究者と情報提供者である現地の人々とが、実践や共有された意味・価値観に関して、共有された理解のセットを探求するものである。当事者たちが共有し、(本来的に)アウトサイダーである研究者が共有しないプラクティスを明らかにする唯一最善の方法があるわけではないことを認めつつも、筆者は、筆者と読者を共に現場へと置き、様々な行為者の生きた経験に内在する声や意味を拾おうとするエスノグラフィーこそ、重要な1つのアプローチであると主張する。

以上のレビューに立脚し導出されるのが、冒頭で書いた2つの研究課題である。こうした課題を解くためのエスノグラフィーのフィールドとして筆者が選択しているのが、酒蔵Aと酒蔵Bという2つの酒造企業である。前者は、日本古来の杜氏システムを採用し続け、伝統的で季節性の高い酒造りを今も行なっている企業、後者は反対に、酒造りの自動化を進め、季節を問わず生産を行っている近代的な企業である。この2社それぞれに、有給の従業員として雇用され、酒造りの実践を現場で参加・観察することで、上記の課題に答えようというのである。

分析結果を記述したパートでは、現地の酒造りの場が、現地従業員との相互作用の中身を含めて克明に記述されていく。居住を伴うエスノグラフィーによって得られた事実は極めて多様であり、また1つ1つが極めて興味深いものとなっている。

例えば筆者は、ベテランの蔵人が初心者とどのようにして関わり、技術の重要な側面に注意を向けさせるのか、その遂行性と情緒性に焦点を当てている。これは伝統的な酒造りを続けている酒蔵Aだけでなく、近代化された酒蔵Bにおいても共通して見られたことであった。ここに筆者は、酒造りが極めて身体的な経験であるということ、また酒造りの実践の中で、観察者と観察されるもの、主体と客体との知覚が相互に強い関連性をもって現れる、という点を見出している。

もう1つ、筆者が提示する重要な発見が、日本の酒造りにおける生物の無生物との関係性である。筆者によれば、酒造りの場合、現場で用いられる道具、そして米や醪(原料が発行した固形物の状態)、酵母といった、いわゆる無生物までもが極めて重要なアクターとなっており、しかも、人と人との間に相互作用が起こるように、人とそうした無生物との間にも重要な相互作用が起こっている。そして筆者は、人と人はもちろん、上記のような人と無生物との相互作用こそ、日本の酒造りの存在意義を形作り、維持するための最も重要な要素である、としているのである。

このような発見を通じて、筆者は、一方で日本の酒造りの実践に対する新しい見方を示し、他方で、筆者が採用するポスト人間主義的視点とエスノグラフィーが、組織/マネジメント研究の諸問題に対して新しい視点を提供しうることを主張している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、実践(practice)に関わる研究、ディスコースに関わる研究、そして組織エスノグラフィーに関わる膨大な研究を丁寧に渉猟し、自らが設定した課題に、現地での居住を伴うエスノグラフィーによって取り組んだ労作である。3名の審査がとりわけ高く評価するは、宮川氏が行った膨大な文献レビュー量と、その消化のレベル、それを自らの研究課題として落とし込んだこと、そして、2つの酒蔵における長期にわたるエスノグラフィーを通じて幾つかの興味深い発見事実を提示したこと、である。

まず文献レビューについてである。宮川氏は、多くの日本人学生が苦戦し、時に誤読をしてしまうようなオリジナル文献についても、かなり高い精度で読みこなすことができている。DerridaやBourdieuといった文献を正確に咀嚼し、自らの議論に実装できているのは、氏の英語力もさることながら、高い読解力あればこそといえよう。執筆された英語論文の質の高さも含めて、評価したい。

長期にわたるエスノグラフィーによって提示された発見事実の中にも、注目すべきものが複数含まれている。例えば、酒造りの身体的な側面、生物の無生物との相互作用などは、いわゆる実証主義的な研究や、(慎重な方法論的検討を伴わないという意味で)素朴なエスノグラフィーではたどりつかないポイントであったように思う。

もちろん、論文として問題があることも事実である。審査において指摘されたのは、大きく分けて2つの点であった。

1つ目は、自分自身が展開したい議論の内容、全体としての構造をより洗練する必要があるという点である。ごく大まかに分類するだけでも、実践(practice)に関わる研究、ディスコースに関わる研究、そして組織エスノグラフィーに関わるの3つが紹介されており、さらにその中で、新制度派組織論、構造化理論、ハビトゥスの議論、ディスコース分析に関わる議論など、単独でも膨大な研究蓄積が存在する複数

の理論・概念が渉猟されている。残念ながら、その全てが明確な形で関連づけられ、筆者の研究課題と明確に関係付けられているとはいえないのである。その結果、論文全体の構造が、少し見えづらくなっている。1つ1つの理論・概念については正確な理解がなされており、致命的な欠陥であるとはいえないが、残念なポイントではある。

2つ目は、若干ではあるが、形式的な問題が残されているということである。例えば、*Sake-Making Practice as An Outline of a Cultural Practice* と題して、30 ページほどを要して日本の酒造りの背景情報を紹介した部分があるが、これははたして本文中に記載されるべきなのか、それとも Appendix にまわされるべき内容なのか。筆者が選択したように本文中に記載しても大きな問題はないのだが、その場合にも、なぜこの種の背景事情に関わる淡々とした記述をあえて本文中で行わなくてはならないのか、その理由を明記する必要があったはずである。それ以外にも、相対的に分量が多い節(数ページにわたる)と短い節(数行で終わる)があり、全体としてのバランスを欠いているなど、1つ1つは些細なことであるが、気になる点がいくつかある。こうしたポイントについては、例えば投稿論文を執筆したり、本論文を書籍として出版したりする際に、十分な注意を払うように指導済みである。

以上のような問題は見られるものの、いずれも博士学位として決定的な欠陥とはいえず、むしろそうした欠点を補って余る貢献があったと審査委員一同は考える。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士(経営学)の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

令和2年9月9日

審査委員	主査	准教授	服部泰宏
		教授	鈴木竜太
		教授	松嶋登